

20. テクネガスによるじん肺症の検討

張 幸 高橋 範雄 山本 和高
杉本 勝也 楊 景濤 石井 靖
(福井医大・放)

従来の呼吸機能検査では、じん肺による早期の局所的な換気および血流障害を検出できない。そこで、RIを用いた肺機能検査をじん肺患者に応用した。三検出器回転型ガンマカメラ(東芝製 GCA9300A/HG)を用いて、テクネガスを使った肺換気と ^{99m}Tc -MAAによる肺血流分布のSPECTを実施した。同時期に行った肺のHR(高分解能)CT像と、マーカーを基準として、同様の横断面におけるSPECTとHRCTの画像を比較した。胸部CTでのじん肺病変の進展に伴って、同じ部位の肺換気、血流機能の低下がうかがわれて、間質性の不規則線維化病変では、実質性の粒状線維化よりも換気、血流機能低下の強い傾向がみられた。肺換気、血流SPECTはじん肺の機能的な評価に有用であると考えられた。

21. 肺癌放射線治療後のタリウム腫瘍SPECT像の評価

多田 明 小林 昭彦 齊藤 泰雄
(国立金沢病院・放)
岡部外志彦 木部 佳紀 (同・内)

肺癌患者で放射線治療の前後でタリウム腫瘍SPECTを行った7例を検討した。放射線治療前のSPECTでは全例で病巣部に明瞭な異常集積を認めた。放射線治療後の画像の評価は、病巣部と放射線肺炎に関して行った。病巣部では7例中6例で、異常集積の消失や改善が認められた。従来の画像診断方法ではPRに留った5例中2例ではタリウムが完全に消失していた。放射線肺炎の部位にはタリウムの異常集積が見られ、CT等ではっきりしないような肺炎部位でも異常集積が見られた。新たな病変との鑑別が必要になるであろう。

22. ^{201}Tl SPECTによる脳腫瘍の評価

蔭山 昌成 瀬戸 光 清水 正司
呉 偉翼 神前 裕一 永吉 俊朗
森尻 実 渡辺 直人 亀井 哲也
柿下 正雄 (富山医大・放)

【目的】脳腫瘍の疑われた患者に対して ^{201}Tl SPECTを施行し、その検出能に検討を加えること。【方法】脳腫瘍の疑われた患者39名に対して、 ^{201}Tl 111 MBq 静注20分後からSPECTを撮像した。【結果】原発性脳腫瘍は、24例中21例で検出可能であり、検出不能であったのは、low grade astrocytoma 2例とmedulloblastoma 1例であった。また、astrocytomaのgradingも可能であった。転移性脳腫瘍5例、頭蓋骨腫瘍3例は、全例検出可能、非腫瘍性疾患7例中、 ^{201}Tl 陽性であったのは、発症12日目の脳梗塞1例のみであった。【考案】 ^{201}Tl SPECTは、脳腫瘍の検出、特に術後症例において有用と考えられた。

23. ^{201}Tl シンチグラフィによる骨軟部腫瘍の検討

宮内 勉 利波 紀久 横山 邦彦
秀毛 範至 絹谷 清剛 油野 民雄
滝 淳一 隅屋 寿 久田 欣一
(金沢大・核)

骨軟部腫瘍性病変が疑われた症例に ^{201}Tl シンチグラフィを施行した。対象は病理学的に診断の確定した50症例で、悪性腫瘍28例、良性病変22例である。

^{201}Tl 静注3時間像では悪性腫瘍の75%、良性病変の46%に集積し、悪性腫瘍が有意に陽性描画された($p < 0.05\%$)。悪性腫瘍の軟骨肉腫は陰性例が多く、良性腫瘍の巨細胞腫では全例で高度の集積が認められた。

さらに、化学療法における治療効果の判定、手術後の腫瘍残存や局所再発の検出に有用と考えられた。